

ウェルカム・ベアの由来

ひろたに ひろこ
広谷 浩子(学芸員)



図1. アラスカヒグマの運搬の様子。ゆっくりと倒して、台車に乗せてエントランスまで運びました。

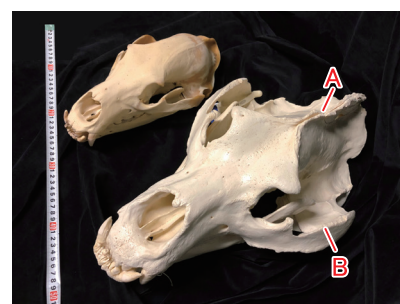


図3. エゾヒグマ(左)とアラスカヒグマ(右)
A: 矢状隆起, B: 頬骨弓(頬骨の張り出し)。

博物館の看板グマ

博物館に入るとすぐに目とまる大きなクマ。アラスカヒグマ *Ursus arctus middendorffi* ^{はくせい}の剥製です。2001年8月に当館に寄贈されたこの標本は、高さ約5mの巨大な立ち姿をみせ、ウェルカム・ベアとして来館者の記念写真におさめられています。コロナ禍のもと、臨時休館のお知らせや館内での感染予防のお約束を伝えるクマのキャラクターとしても活躍しています。当館の顔である彼の由来を知る人は少ないと思います。剥製を寄贈して下さった宮本二郎さんから昨年6月に連絡をいただき、鎌倉のお宅を訪問し新たに頭骨もいただきましたので、この機会に詳しい紹介をしたいと思います。



図2. 休館中の当館ウェブサイトに登場。

このヒグマは、1992年に宮本さんご自身がアラスカで狩猟されたものです。NPO団体 Safari Club Internationalの記録によると、1992年時点で、このクマの頭骨は世界歴代4位の大きさでした。アメリカで剥製に加工され、宮本さんの経営する会社のホールに飾られていましたが、会社を引退される時に、博物館へ寄贈して下さいました。博物館では、数年間収蔵庫に保管していましたが、破格の大きさに見学者が驚くことしばしばでした。

2005年11月、エントランスホールに魅力的な展示品を置こうということが学芸員会議で決まり、その第1弾としてこの剥製が選ばれました。収蔵庫からの移動は職員が行い、新たに背中をワイヤーで固定して、記念撮影用の台や侵入防止の柵も整備しました。

至近距離から剥製をよく観察すると、面白いことがわかってきました。肩から背中の毛が薄いのは、巣穴の出入りで擦り切れたのでしょうか。2階の連絡橋からクマを見ると、黒い眉がくっきりとついたユーモラスな顔に驚きます。左手の第2指の爪が折れていますが撃たれた傷ではなく、爪をよく使い込んだ結果、折れたように見えます。

頭骨と対面

今回の頭骨寄贈はうれしいできごとでした。迫力ある巨大剥製に加え、世界記録に残るような頭骨を調べることができるので。頭骨をひと目見て大きさと見たこともない形に驚きました。北海道に生息する同種のヒグマと比べると(図3)、特徴が際立っています。頭骨は非常に大きく頭頂部に矢状隆起が発達していました。頬骨は横に張り出し側頭部に大きな空間があります。下顎は頑丈で垂直に立ち上がっていました。これらの特徴から、側頭部には食べ物の咀嚼に用いる大きな筋肉がついていたことがわかりました。こんな筋肉を使ってヒグマは何を食べていたのでしょうか。

このヒグマには、上顎の右犬歯がなく、

歯全体は摩耗していました。頭骨を構成する骨の縫合線も目立たず、つながって見えます。これらは老齢個体の特徴です。近いうちに、年齢査定をしようと考えています。

ハンティングの詳細情報

頭骨の受け取り時には、宮本さんご自身とお嬢様が迎えてくださいました。20年ぶりにお会いした宮本さんはご高齢にもかかわらず、りんとした姿勢が印象的でした。頭骨と一緒に現地スタッフの手書き地図と頭骨の計測記録もいただきました。採集地はコールド・ベイであることがわかりました。地図には「3頭のクマがすんでいる急流で、約7m真下のクマをねらった。危険なアプローチだったが二郎(宮本さん)は勇敢なハンターだった」とのメモも添えられていました。我々の想像を超えた巨大グマとの緊迫した出会いがあったのでしょうか。